世界と錬金術士

火具土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界と錬金術士

【Ｎコード】
Ｎ５４８１Ｘ

【作者名】
火具土

【あらすじ】
無と有を操る者、錬金術士。永きに渡って世界を救ってきた者達。故に行き着く先には困難が多い。これは、重い錬金術士の宿命を背負った男と魔法少女達の物語。

全ての始まり（前書き）

始まりは、なのは撃墜（１１歳）の時から

全ての始まり

「なのは！　オイッ！　しっかりしろよ！！」

「ゴホッ…ヴィ…ヴィータちゃん……ごめ……んね」

「バカッ！　しゃべんじゃねー！！」

胸を一突き、しかも貫通して獲物が抜かれた所為で、血が止まらずに次々と溢れてくる。

咳き込むと、ドロドロとした血がなのはの口から吹き出てくる。

クソッ！あたしのせいだ！なのはの体は限界だったのに、無理やりにでも止めなかったわたしせいだ！！

「医療班はまだなのか？！　応急処置にも限度があるぞ！！」

「そ、それが…高町教導官の前に、医療班が他の場所に向かってしまったため…」

「チィッ！　なら治癒魔法を使えるヤツはいねーか？！　ヘタクソでもいい！　血を止めねーと…」

血の流しすぎで、なのはの顔が青くなってきてやがる！このままじゃ…なのはは……いや、ぜってーさせねー！！

鉄槌の騎士ヴィータは、いくつもの困難を乗り越えて来たんだ！これくらいで諦めるもんか！！

そんなあたしの意志とは裏腹に、なのはの血が止まらない。まるでなのはの命そのものが流れてくるみたいで…恐ろしくなった。

いつの間にかなのはの目は閉じられてて、体も冷たくなってきて……

もう、ダメなのか……？なのはは…なのはは……！

「おい、聞こえるか？　しっかりしろ！」

「……え？」

聞き覚えのない声に顔を上げると、知らねー男があたしの反対側にいた。武装局員も気づいていなかったようで、焦り気味に武器を構える。

それでも男は怯まない。それどころか、背中に背負っていたデッケー剣を投げ捨てた。

「こちらに敵意はない　これでよろしいか？」

「ぁ、ああ……」

「傷は……かなり深いな…傷を負って何分になる？」

「え、えっと…約１０分ほどになります」

「道理で衰弱しているはずだ　棺桶に片足どころか、半身突っ込んでいる状態だ　後５分もすれば死んでるぞ」

男の言葉に、あたしは恐怖のどん底に突き落とされたような気がした。

なのはが……死ぬ…？

「なのはッ！！　起きろよ！！　目を覚ませよ！！！」

「落ち着け」

「落ち着いてられっか！！」

死にかけの人間を目の前にしてるのに、冷静な男の胸ぐらを掴んで、真っ正面からガンを飛ばす。

けどコイツは、そんなあたしの目を見ても怯まなかった。逆にあたしが怯まされる。

ポンッ　ナデナデ

「落ち着いたか？」

「あ、ああ…すまねー…」

「気に病むな　この子はお前にとって大事な存在なんだろう？」

うぅ…！なんかわかんねーけど、コイツは信用してもいいんじゃねーか？

あたしの騎士としての勘が、そう訴えてくる。それになんとなくだけど、コイツならなのはを治してくれる気がした。

「大丈夫だ、ちゃんと治してやる」

あたしの心を見透かしたようなタイミングで、男がそう告げてきた。なんか…ズリーくらいにカッコイイな、コイツ…

男はあたしになのはを抱いているように言うと、男の持ち物であろう袋を漁り始めた。

「…あった」

取り出したのは、妙な装飾の施されたビン（？）らしき物。ただ、中身は見えない。液体なのは間違いないと思う。さっきからピチャ

ピチャ音してるし…

蓋を開けると、なのはの口元にくっつけて中身を飲ませようとビンを傾ける。けど、なのはにはもう飲み込む力もないみたいで、口の端から液体がこぼれた。

「なのは……頼むから飲んでくれよ…！」

「仕方あるまい…」

すると、男がビンの中身を自分の口に含んだ。これからコイツが何をするのか、この時のあたしにはわからなかった。

後になって考えても、コイツのこの行動を止めるべきだったのか、止めなくて良かったのか、あたしには理解出来なかった。

だって、あたしはこういうのを見るのは初めてだし、されたこともねーから。

「…ん」

男がビンの中身を口に含むと、なのはの唇に唇を合わせた。あまりの衝撃的な光景に思考が硬直してしまう。

後ろに立ちすくんでいた武装局員も息を飲んでいたから、コイツらにも予測出来なかったんだろうよ。

コクンッ

なのはが液体を飲み込んだのを確認すると、男は唇を離した。その時に、なのはの唇と男の唇の間に細い糸みたいのが見えた気がしたけど、気にしないことに……いや、気にする余裕がなかった。

パアァァァン

「な、なんだ…？！」

すぐに、なのはの胸元（リンカーコアか？）から小さな白い花火みたいのが吹き出て、キラキラとなのはの体が淡く光った。

光りが収まった時には、もうなのはの傷は治ってた。バリアジャケットも修復されてたし…何者なんだ？コイツ。

なのに、男の表情は険しい。

あたしの心が不安に駆られる。

「なぁ…？　なのはは治ったんだよな？　もう、大丈夫なんだよな？」

「ケガは治した…が、いかんせん血を流しすぎたようだ　このままじゃ意識を取り戻さない」

じょ、冗談だろ……？せっかく治したのに、目覚めないなんて……
……でも、コイツならまだ…
あたしは藁をも掴む思いで、男に視線を送った。男はポケットを漁って、何かを探しているようだった。
そして徐に取り出したのは、薄ピンクのガラスの破片みたいな物。

「アイオン！」

呪文か、それとも誰かの名前かわからねーが、男が声を上げると、空中に男の持ったガラスの破片と同じ色のガラス玉を持った女が現れた。
だけど、かなりちっちぇー。あたしよりも一回りちっちぇー。しかもプカプカ浮いてやがる。リインみたいな存在なのか？

「なんじゃ？　妾は眠たいのじゃが…」
「そう言うな　この子に命を吹き込んでやってくれ」
「…仕方のない主じゃ」
そう言って男の手からガラスの破片モドキを受け取ると、握りしめ

自らの口元に持ってくる。

そしてその手に握ったガラスの破片モドキに、フーッと息を吹きかけた。

すると粉末状になった破片モドキが、なのはの体に吸い込まれるように消えていく。同時に、なのはの顔が血色のいいものに変わっていった。

男は言った。

「安心していい　これでもう大丈夫だ」

緊張の糸が切れたあたしは、力が抜けて情けなくも涙が出てきてしまった。しかも部下の前で。

だけど、男が壁になってくれたから泣き顔は見られなかった。泣き声は聞こえてたみたいだけどな。

「では、俺はこれで」

「あ　ちょっと、待てよ！」

あたしが泣き止んだのを見計らって、男が立ち去ろうとした。それをあたしが制する。

「なのはを助けてくれたから、アンタがここで何をしているとか、何者かは聞かねー　けど、一つだけ教えてくれ」

「何だ？」

「アンタ、名前は？」

あたしの質問に、男はフッと顔を綻ばせた。

「メリヒムだ　メリヒム・メリヤス・ウリス」

「あたしはヴィータ　メリヒム、なのはを治してくれてありがとうな」

あたしのお礼を背中で受けたメリヒムは、ふと思い出したかのように何かをあたし目掛けて放り投げてきた。

これは…宝石？でもなんだか魔力があるような…

「俺に用が出来たら、それを砕くといい　必ず駆けつける」

「わかった、じゃあな」

メリヒムは袋を担いでどこかに歩いていった。なんか、風来坊みて

ーだな。

メリヒムが見えなくなったころ、ようやく医療班が駆けつけた。かなり焦ってた様子だから、大方報告を聞いてとんぼ返りしてきたんだろう。

でも、もうメリヒムが治しちまったから患者はいねーわけで、骨折り損のくたびれもうけってわけだ。

あたしらは意識のないなのはを連れて拠点である観測基地へと戻った。

だけど、なんでメリヒムはこんなとこにいたんだろ？焦ってたとはいえ、あたしにも武装局員にも気づかれなかったし…

ま、次に会ったときに聞けばいいか。今はなのはが優先だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

重傷だった少女を治療した後、俺は街の北の方に位置する大きな建物へとやってきていた。

「あ、メリヒムさん　お疲れ様です　今回の『世界』はどうでした？」

「ああ、なかなか危険なところのようだ　行ったそばから、胸を刃物で一突きされた少女に出会った」

「…わたしには詳しいことは聞かされてませんが、気をつけてくださいね？　あの人、メリヒムさんになら、何をしてもいいと思ってる節がありますから」

「心配は無用だ、アナ　それに、俺はアイツの人形じゃない　断る時には断るさ」

受付のアナ――――本名、アナストラ・セルヴァティカと世間話。そしてさらに奥へ。

「あら？　メリヒム、あんた戻ったの？」

「……（スタスタ）」

「ちょっと！？　無視しないの！？」

「おお、フェニル　あまりの小ささに見えなかったぞ」

「キイィィィッ！！　そこまで小さくないわよ！！」

「椅子に立たないと見えないのだから、十分小さいとおもうが？」

もう1人の受付のフェニル――――フェニル・ニート（12歳）を弄り、この建物の最奥へ。

俺の身長の2倍以上ある扉を押し上げる。そこは、ステンドグラスの大きな窓が備え付けられた書斎。
書斎の中央には、金髪を靡かせて振り向いた1人の美女が存在した。

「お帰りなさい　今回はどうだったかしら？」

「断定は出来ないが、今まで見てきた『世界』とはどこか違う」

「それは私の命令を受けたメリヒム個人として？　それとも『錬金術士メリヒム』としての？」

「……今回は『錬金術士』の方だ」

「なるほど……それは穏やかじゃないわね」

この建物の長―――ノエイラ・マーテルの顔が真剣なものになり、緩い空気の代わりに重苦しい空気だけが部屋に満ちる。
それだけ『錬金術士』――特に俺の『錬金術士』は重要であり、影響力あるものなのだ。

「無茶な真似だけはしないでね？　私はもう、知り合いが死ぬのはいやなのよ」

「フッ、お前はそんなに弱い女じゃなかろう？　それに戦いがある

以上、命の駆け引きもある　そのことはお前も重々理解しているはずだ」

「わかってるわ　私はそれをわかってる上でお願いしてるのよ」

「…またお前は難題を突きつける　ハァ…わかった　俺も犬死ににするつもりはないからな　いざという時は、仲間を頼るさ」

「いい男はいい女の言うことを素直に聞くものよ」

ノエイラの言葉に苦笑しながら俺は書斎を後にした。

さてと、おそらくヴィータはあの子が目を覚ましたら俺を呼ぶだろうから、あまり没頭しないものを研究するとしよう。

全ての始まり（後書き）

ま、プロローグだし、こんなもんかと。

目安では１話辺り６０００～８０００くらいにまとめる予定です。

第1話

ヴィータＶｉｅｗ

なのはが墜ちて2日。なのはは運ばれて2、3時間で目を覚ましたけど、色々調べるために検査入院した。

はやてやフェイト達にも連絡はしたけど、仕事を片付けてから向かうって言ってたから、多分今日辺りに来ると思う。

だけど、当の本人は

「ヴィータちゃん、もう大丈夫だから」

「ダメだって！　シャマルも言ってたろ　なのはの体の芯には疲労が溜まってるんだって」

体がなんともないから退院するって言って聞かない。だから、今はあたしがお目付役だ。

でも、なのははガンコだから困る！少しは自分の体を大切にしろって。

あ、そうだ。メリヒムも呼んでおこう。メリヒムからも何か言ってくれれば、なのはも引き下がるかもしれねーし。

「アイゼン！」

グラーフアイゼンを起動させ、ポケットに突っ込んでたメリヒムからもらった宝石を取り出す。

「ヴィータちゃん？」

「よっ　おりゃあー！」

宝石を放り投げてアイゼンのスイングがヒット。宝石は粉々に砕け散った。

あたしの行動にビックリしてるなのはは、目をぱちくりさせてる。この後に、もっとビックリしなきゃなんなくなるんだけど…教えてやんねー。

言うことを聞かねーなのはは、はやて達の前で辱めを受ければいい！

「う゛っ……なんかイヤな予感がするの…」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メリヒムＶｉｅｗ

工房でいつものように調べものをしていると、どこか遠くで反応したものがあった。あれは、ヴィータに渡した物だな。

「さて、と」

手早く用意を済ませ、ノエイラの元へ向かう。いや、面倒だからアナでいいか。

「メリヒムさん　今日はどうしました？」

「また、この前の世界に行ってこようとな　念のため、一言伝えておこうと思って立ち寄った」

「わかりました　ノエイラさんにはわたしから伝えておきますね」

「ああ、頼む」

「いってらっしゃいませ」というアナの言葉を背に受け、俺はとある場所へと向かった。

２０分くらい歩いただろうか？俺の前には崩れかけの遺跡が存在した。

ここは普段立ち入り禁止の場所だが、ノエイラの許可を得た俺は入ることが出来る。イコールそれだけ危ない場所、もしくは一般人に認知されてはマズいものが存在する、ということである。

この遺跡は後者に当たる。

俺としては、ノエイラが気にするほどのものではないと思うが…アイツにも色々不安要素があるのだろう。

そのうち歩むべき道が無くなる。要は行き止まりというわけだが……俺にとっては行き止まりではない。

壁に描かれた2匹の蛇が絡まっているモチーフに手を当て、魔力を注ぐ。

すると注がれた魔力が壁一面に張り巡らされ、人1人がくぐれるくらいの穴が現れる。それこそが、世界を渡る入り口となる。

穴の中に入った途端、なんとも言い難い感覚に陥る。が、2秒もするとその感覚は消え去り、地に足が着く。

さて、感覚の赴く方へ行くとしよう。見舞いの品は何が良いだろうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なのはＶｉｅｗ

「なのはッ！　大丈夫？！」

「にゃはは　大丈夫だよ、フェイトちゃん　心配かけてゴメンね、大事な時なのに…」

「ううん、なのはの方が大事だから」

「相変わらずやなぁ、フェイトちゃんは　もう、わたしはごちそうさまや　それはそうとなのはちゃん、ヴィータはどないしたん？なのはちゃんの監視してたんちゃうんか？」

フェイトちゃんが病室に飛び込んできて、わたしの心配をしてくれる。その後ろからはやてちゃんやシグナムさん達が続いて入ってくる。

フェイトちゃんの予想通りと言える反応に苦笑いがこぼれる。けど、はやてちゃん。監視はヒドいの……せめて見張りとか…あまり変わらないかな？

そしてはやてちゃんの疑問に上がったヴィータちゃんは宝石（？）を砕いて数分は病室にいた。

けど、その後「ちょっと外に行ってくる　けど抜け出すんじゃねーぞ！　抜け出したら、アイゼンでボッコボコにしてやっからな！！」って息巻いてどこかに行っちゃった。

その旨をはやてちゃんに伝えると、はやてちゃんも首を傾げてた。どうやら、はやてちゃんにもわからないみたい。

「しかし高町、聞いていた話しと違うのだが…私達はお前が不意打ちで胸を一突き、しかも貫通するほどの重傷を負ったと聞いた　だが見たところ、そのような傷はおろか、掠り傷一つないように見える　これはどういうことだ？　情報が間違いだったのか？」

「そのことなんですが…正直なところ、わたしにもわからないんです…」

「…どういうことなん？」

「敵が不意に現れて、後ろから一突きされたところまでは覚えてるんだけど…その後は記憶が曖昧なの　ヴィータちゃんが、武装局員の人達に大声で怒鳴ったりしてたのは、うっすらと覚えてるんだけどね……」

ヴィータちゃんに聞いても適当にはぐらかされちゃうし、そのときいた武装局員の人達に聞いても、ヴィータちゃんに口止めされてるから言えないって、教えてくれないし。

「う～ん、謎やなぁ…ヴィータは回復系の魔法は苦手やし、武装局員の中にシャマル並の治癒魔法の使い手はおらへんやろし…」

「なんにせよ、ヴィータだけが事実を知ってるってことだね」

う～ん、わからないの。誰がどうやって治したのか、なんでヴィータちゃんが教えてくれないのか。

「あ、はやて　もう来てたんだ」

「ヴィータ、どこ行って……えっと、どちら様？」

けど、その疑問もすぐに解決したの。ヴィータちゃんが連れてきた人によって。

その人は男の人で、シグナムさんよりも身長が高くて、髪の色が夕日みたいに鮮やかな赤色で、ツンツンに髪の毛が立ってた。

顔もスゴく優しそうで、フェイトちゃんやシャマルさんがよくするスッゴく安心する笑顔を、わたしに向けながら病室に入ってきた。

その人は、はやてちゃんの問いに答えるように頭を下げると自己紹介を始めた。

「初めまして、メリヒム・メリヤス・ウリスと言う」

「メリヒムはあのとき、なのはを治してくれた人だ！」

ええっ！？この人が、わたしを治してくれた人なの！？

「どうだ？　体に違和感などはないか？」

「え、は、はい！　もう全然、なんともないです」

「だからって、すぐに現場復帰しようとするのはいただけねーよな？」

うぅ…ヴィータちゃんが、いつになくイジワルな気がするの…そして、フェイトちゃん達も苦笑いしないで欲しいの。

「フッ、元気が有り余っているようだな　医者としてはなによりだ」

「医者？　メリヒムって医者だったのか？」

「ああ、ちょっと特殊な医者だ」

特殊？ってことは…

「メリヒムさんも魔導師なんですか？」

「…似たようなものではあるな　だが、『も』というのは…？」

「ヴィータちゃんから聞いてないんですか？　ここにいるわたしたち全員、『時空管理局』に勤める魔導師なんですよ」

「ほう…その齢で役所勤めとは……して『時空管理局』とは一体どんな組織なんだ？」

え！？管理局を知らない！？

フェイトちゃんやはやてちゃん達も、その切り返しは予想だにしてなかったみたいで驚きを露わにしてる。

そこからはみんなでメリヒムさんに、管理局の説明をすることになった。その際にみんなで自己紹介を済ませた。

管理局はミッドチルダという都市が中心となって設立した数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関であり、通称「管理局」と呼ばれていること。

警察と裁判所が一緒になった様なところ」で、ほかにも文化管理や災害の防止・救助もおもな任務としていて、わたしたちはお手伝いをしていること、など。

小難しい話しだったけど、メリヒムさんは頭がいい人みたいですぐに理解してくれた。これにはビックリなの。

それからわたしが正体不明の敵にやられた時の経緯を、ヴィータちゃんと一緒に話した。

「なるほど、大体の経緯はわかった。だが、何故ああなるまで誰も止めなかった？　なのは自身も、疲労が蓄積していたのは理解していなかったのか？」

「あたしらはちゃんと止めるよう言ってたけど、なのははガンコで聞かねーんだ」

ヴィータちゃんの言葉を聞いて、みんなの顔を見るメリヒムさん。フェイトちゃんやシグナムさん達は、みんな困ったような表情で頷いてた。

そこでメリヒムさんがわたしをジッと見てくる。何も言ってくれなかったけど、目が物を言ってた。「なんでだ？」って。

しばらくは無言が続いたけど、いつの間にかわたしは口を開いていた。

「わたしは…みんなを守りたいんです　わたしは、わたしの力で救える全てを救いたい　そのためにも休んでいる暇はないんです」

「それは立派な志だ　だからこそ、体を休めることも大事なのではないか？　例えば今回の一件　たまたまお前が傷を負うという結果だったが、もし刺されたのがお前ではなくお前の守りたい者…仮にヴィータとしよう　蓄積された疲労により、お前の反応が遅れたがためにヴィータが刺された　これはお前の自己管理のせいにならないのか？」

「違うんです　疲労とかじゃなくて、ただわたしが弱いから…　だからわたしはもっと強くなるために、救いを待つ人のためにこれくらいで休んでちゃいけないんです！！」

パンッ！

何をされたかわからなかった。右の頬がヒリヒリして、心がスゴく痛くて、なんだかわからないうちに涙が溢れてきて…

その歪んだ視界にメリヒムさんが左手を振り切った姿と、みんなが驚いた顔がかろうじて写った。ああ…わたし叩かれたんだ。

「なのは、お前は忘れているのではないか？」

「ヒック…なにをですか？」

「ここにいるのはお前の仲間だろう？　お前はみんなを守ると言ったが、その目的のために仲間を頼らないのは、仲間に対する裏切り行為なのではないか？」

「そんなッ！？　ッグ…そんなことありません！」

「お前がそう思っていても、相手はそう思わない　コイツらは、お前が無理をしてまで守らなければならないほど弱いのか？　力があるのに助けられない　これが、どれだけ辛いかものなのか　お前が一番知っているんじゃないのか？」

力があるのに助けられない…それはものスゴく辛いし、悔しいこと。昔、お父さんが大怪我したときがあった。そのときお兄ちゃんはスゴく悔しそうだった。

そうだ…今のわたしは、あのときのお兄ちゃんにそっくり。強さだけを求めて、周りを見ないで突っ走ってた。

そのときのわたしは、お兄ちゃんが怖くて近寄れなかったけど、お姉ちゃんはお兄ちゃんとお母さんの心配ばかりしてた。

結果的にお父さんが退院して元に戻ったけど、あのままだったらどうなってたんだろう…？想像もしたくない。

そんなわたしの心境を悟ったかのように、メリヒムさんが言葉を続ける。

「経験や反省は、同じ過ちを繰り返さないためのものだ　今回の経験、次に生かせるな？」

「……ッ（コクン）」

「よし、いい子だ」

ポンポンと頭を優しく叩かれると、ポロポロと涙がこぼれてきちゃった。なんでメリヒムさんの言葉は、こんなに気持ちいいんだろう？

けど、今のわたしにはそんなこと言う余裕もなくて、ただただ泣きじゃくるだけだった。

「なのは」

「フェイトちゃん…今までゴメンね」

「いいの、なのはが認識を改めてくれたから　メリヒムの言うとおり、同じ過ちをしなければいいんだから」

「せやで、なのはちゃん　次からはちゃんとわたしらを頼ってや？」

「そうじゃねーと、今度こそアイゼンでボッコボコにしてやっからな！」

「はやてちゃん…ヴィータちゃん…グスッ……ありがとう」

フェイトちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃんのだめ押しに声がこらえきれなくなってきちゃった。

「……」

視界の端に無言で病室を出て行ったメリヒムさんが写った。もしかして、わたしに気を使ってくれたのかな？そうだとしたら、申し訳ないな。

それからわたしは大声で泣いた。今まで溜め込んだものを全て、涙で洗い流すかのように。

「一緒に慰めてやればいいものを」

「そういうわけにもいかんだろう　子どもと言えど相手は女　初対面の男が軽々しく涙を見るのは良くない」

「フッ、お前のような男がまだ世の中に存在したとはな」

病室の外で、シグナムとメリヒムがこんな会話をしてたとか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メリヒムＶｉｅｗ

病室から泣き声が聞こえなくなり、数分おいた後、俺は再び病室へと赴いた。

中では、なのはがフェイト達と顔を見合わせて微笑みあっていた。

どうやらしっかり和解したようだ。少々、目が腫れぼったくなっているが、スッキリした様子。

最初に俺の顔を見て、ハッとした表情をしたのははやて。

「せや！　なのはちゃんの話しですっかり忘れとったけど…メリヒムさんは、どうやってなのはちゃんを治したんや？」

それを聞いて、ヴィータを除く皆がハッとした表情になった。こちらとしては、答える義務はないので追及されなくても良かったのだが…

「特に特別なことをしたわけではない　俺の携帯していた回復薬を飲ませただけだ」

「でも、あの飲ませ方はなー…」

「「「「飲ませ方？」」」」

ヴィータが言いよどんだのを見て、ピーンときた様子なのははやて。どうやらはやては、勘や相手の感情の機微に敏感なようだ。

次いで、フェイトが顔を赤らめた。確信は持っていないが、おそらくは…というところだろう。彼女も勘が良いと言える。

残りのなのはとシグナムは、わかっていないようだ。なのはは前者

2人と同い年だが、このくらいの年頃の子では普通、予想がつかないだろう。

シグナムはおそらくだが、そういう話しに疎いのだろう。アナとそう変わらない年で、皆目見当もつかないというのは普通じゃないからな

「アイゼン、あのときの映像を」

［Ｊａｗｏｈｌ．］

ヴィータが誰かに命ずると、中空に絵が浮かび上がった。その絵はなのはの胸が血で染まり、ヴィータが必死になって傷口を塞いでいるものだった。

「これから流す映像は本当にあったことだかんな！　現実逃避すんなよ！」

「う、うん」

なのはが頷いたのを確認すると、ヴィータが『アイゼン』とやらに「再生して」と命じた。すると中空に浮かび上がった絵が、音を発しながら動き始めた。

確か古い錬金術士に、こういった技術を開発した者がいたな。これも似たような技術なのだろう。

場面は進み、俺が薬をなのはに飲ませようとしているところへ。ここまでの流れを見て、はやてとフェイトは確信を得たようだった。

「やっぱりそうなんやな♪」

「主はやて？」

「うぅぅ～　ヴィータ、お願いだからこれ以上は…」

「ダメだ！　もう二度と無茶しねーためにも、徹底的にブッ叩く！」

「フェイトちゃん、顔が真っ赤だよ？　それに、はやてちゃん　笑顔がとっても不気味なんだけど…　それとヴィータちゃん　もう絶対にしないって約束したでしょ？」

そんなやりとりの間にも、絵は先に動いていく。場面は俺が薬を飲ませようとして、なのはを抱き上げているところ。

ニヤニヤと女らしくない、イヤらしい笑みを深めるはやて。アワアワと手で顔を隠しているが、指の隙間が開いていて、そこから動く絵を見ているフェイト。

そして、俺が口に含んだ薬をなのはに…

「にゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！！？」

「うわっ、うわぁ…」

「おっほぉ！　ずいぶんとディープにいくんやなぁ！」

「は、破廉恥なッ…！？」

「ま、こうなるよな」

口移しで飲ませたところで各々が大きく反応した。そして薬が効力を発揮、なのはの傷が癒えたところで絵は消え去った。

「にゃあッ！？　にゃあッ！？　にゃあああぁぁッ！？」

ボフンッ

そんな音と共に、顔が真っ赤になったなのはが気絶した。俺が駆け寄り揺り起こすと、俺の顔を見るや否や、再び顔を真っ赤にして気絶する。

また起こすとまた真っ赤になって気絶する。

「いや～今日はええもん見せてもらったわ～　ありがとうな、ヴィータ」

「はやてに喜んでもらえたなら良かった」

「いや、良くないから！　ああ！？　またなのはが！」「ダメやで、フェイトちゃん　なのはちゃんは、わたしらより一歩先に大人になったんや　言わば、これは後学のための勉強や！」

「後学……それならしょうがないね」

俺となのはの後ろで、フェイトとはやてがそんなやりとりをしてたらしいが、俺は全く気がつかなかった。

「にゃあああぁぁぁぁ！！？」

第2話

メリヒムＶｉｅｗ

「き、貴様アァァッ！！」

背後から振るわれた木をかわし、逆に男の背後へ回り込み、無力化する。一種のやりとりに男の父親は目を細め、母親は少々驚いた表情を見せる。

何故、こんなことになっているか。事の発端は数十分前のことだ。

ひとまずなのはを落ち着かせた俺は、なのはの親と対面することを望んだ。助かったといえ、重傷を負ったという事実は変わらない。

それに見ず知らずの人間が医療行為とはいえ、大事な娘さんの唇を奪ってしまった。どんなに取り繕っても、こうした事実は覆せない。

故に正直に伝えようと思い、なのはと手の空いていたフェイト、はやてを伴い、３人の故郷『地球』の『海鳴市』という場所へとやってきた。

「ほぅ…ここが？」

「は、はい…そうです」

俺の問いに、なのはが顔を赤くしながら答えた。あれから、頭が爆発して気絶することはなくなったが、俺を見る度に顔を赤くするようになってしまった。

その光景をはやてはニヤニヤしながら見守り、フェイトがはやての顔を見て苦笑い。聞くところによると、フェイトは管理局で『執務官』という、位の高い資格を取得するために猛勉強の最中らしい。

そんな大事な時間を、こんなことのために割いていいのか？と聞くと「はやてだけじゃ、事実を面白おかしくしそうで心配だから」という、実に友達思いの言葉を頂いた。

なのは先導の下、目についた物の解説を受けながら歩いていると、一件の店らしき建物へたどり着いた。

「ここは？」

「なのはちゃんの家族で経営してる『翠屋』ちゅう喫茶店や！　このシュークリームは絶品やで！」

シュークリーム云々は置いといて、ここになのはの親御さんがいる

のは間違いないようだ。

カランカラン

ベルの音を鳴らして入り口の扉を開ける。店内は落ち着いた雰囲気で、かなり清潔感に溢れている。しかもどことなく、俺の世界の趣があるように感じる。

「あら、なのは　おかえりなさい、今日は早かったのね」

出迎えたのは妙齢の女性。佇まう様がなのはに似ているところから、血の繋がりがあると見ていいだろう。

「あ、うん　ただいま、おか「大変だ母さん！　なのはが…って、なのはぁ！？」お兄ちゃん？」

焦った様子で飛び込んできたなのはの兄らしき人物によって、目の前の女性が母親だと判明。だが、目の前の女性がなのはの兄を産んだとは思えない。

なのはの兄は低く見積もっても１８くらい。４０近い人の若々しさではない。どちらにせよ、俺にとってはさほど重要なことではないが。

「どうしたの恭也？　なのはの顔見て驚くなんて」

「あ、あぁ…今さっき、リンディさんから連絡があったんだ　なのはが重傷を負って運ばれたって」

「あ、あのねお兄ちゃん　そのことなんだけど…」

「なのはが重傷を負ったのは事実だ」

横やりを入れるように発言すると、『恭也』と呼ばれた兄と母親の視線が俺に向けられた。兄は威嚇するような目つきで、母親は不思議なものを見る目で。

「あら、ごめんなさいね　お客様をほったらかしにしちゃって」

「お前は何者だ？」

「俺の名はメリヒム・メリウス・ウリス　しがない錬金術士だ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なのはＶｉｅｗ

「ちゃんと報告したいことがあるの」と、メリヒムさんを警戒する

お兄ちゃんを説得し、お母さんはお店を臨時休業にしてくれた。
そして、休業の看板を入り口に掛ける時に、ちょうどお店の前に１台の車が止まった。見覚えのある車だったから、この後の展開も予想できたの。

「なのはあぁぁぁぁ！！！」
「うにゃあぁぁぁぁ！！？」

車から飛び降りてきたアリサちゃんに、思わず悲鳴が出ちゃった…けど、後から降りてきたすずかちゃんの表情を見たら、わたしは何も言えなかった。
だって涙の痕が残ってるんだもの。きっとエイミィさん辺りが、なのはのこと教えてあげたんだろうな。

「なのはッ！？　だいじょ…アリサ？」
「なんや、アリサちゃんとすずかちゃんだったんか　わたしはてっきり、ヤーさんがなのはちゃんを誘拐しに来たかと思ったで」
はやてちゃん、『ヤーさん』ってだれのことなの？安田さん？それとも山本さん？

「なのはちゃん　『ヤーさん』って言うのは、『や』から始まる3文字の職業の人のことを指す隠語なんやで」

「『や』から始まる3文字の職業……わかった！　『八百屋』さんだね、はやてちゃん！」

「えーっと…あんな、なのはちゃ　そこまでベタなボケされると、逆にツッコミづらいんやけど…」

あれ？ボケたつもりはないんだけどな…でも他に、『や』から始まる職業は思いつかないの…

「アンタらね……わたしがどんだけ心配したと思ってるの！！」

「その心配はもっともけど、抱きつくのは考えものだよ？」

「なんでよ、フェイト」

「だって、なのはがケガしたのって右の胸の辺りだよ？　そんなところに抱きついたりしたら…」

サーッと音がするくらい急に、アリサちゃんの顔が青ざめた。けどね、アリサちゃん。それだけ重傷だったら、なのは歩いてないよ？

でもアリサちゃんはパニックになってるようで、腰に巻きつけてた手をわたしの肩に乗せると、勢いよく前後に揺らし始めた。

「なのはッ！　しっかりしなあさい！　傷口に抱きついたのは謝るから起きなさいよ！！」

「にゃにゃっ、にゃっ！　にゃあっ！」

「ア、アリサッ！　そんな乱暴に揺すったらダメだよ！」

「アリサちゃんったら……でもなのはちゃん、元気そうでよかった」

「アカン……面白すぎやで、アリサちゃん」

アリサちゃんのシェイキングは、いつまでも戻ってこないことを不振に思ったお姉ちゃんが来るまで続いた。うえっ…気持ち悪いの……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メリヒムＶｉｅｗ

当初、なのはの親族（士郎、桃子、美由希、恭也）だけに話す予定だったのが、予想以上に人数が増えた。

最初は、フェイトの母親だというリンディ・ハラウオンと兄であるクロノ・ハラウオン、そしてパートナーであるエイミィ・リミエッ

タ。3人とも時空管理局の職員のようで、なのはが全快しているのを見て驚いていた。

次に、なのはの友人であるアリサ・バニングスと月村すずか、すずかの姉でなのはの兄――恭也の恋人である月村忍。先に挙げたクロノのパートナー、エイミィから連絡がいっていたようだ。

最後に、管理局の『無限書庫』という場所から、なのはの魔法の師――ユーノ・スクライアとたまたま手伝いで訪れていたフェイトの使い魔――アルフ。彼ら2人は、モニター（フェイトから教えてもらった）越しの対談になる。

他にも執事やメイドの姿が見えるが、そこは割愛させてもらう。彼らも、進んで話を聞こうというわけではないようであるし。

場所は高町家の道場。これだけの人数が入る場所がここしかなかったためだ。

「さて、これで全員か？」

「そうね　これ以上に増えるかもしれないけど、待っている時間が惜しいわ」

「では始めるとしよう　俺はゼー・メルズの錬金術士、名をメリヒム・メリウス・ウリスという」

『錬金術士？』と首を傾げる者が何名かいるが、ここで説明していては話が進まない。よって話を続ける。

「今回、高町なのはの重傷した現場に遭遇　その際、治療した人間だ」

「ちょっと待て」

恭也が俺の次の言葉を遮って発言する。質問は後にして欲しいが、その質問は予想している。

「そもそも、なのはが重傷を負ったというのは本当なのか？　どう見ても健康そのものにしか見えないが？」

「先ほども恭也と桃子には言ったが、今回のことは紛れもない事実だ」

「本当なのか？　フェイト」

「うん　わたしもはやても現場にはいなかったけど、ヴィータがなのはと一緒だったから間違いないよ」

初対面の人間より、付き合いのある相手が言った方が信憑性はあるからな。やはりフェイト達に着いてきてもらって良かった。

「でも、変ねえ？　なんで、なのはちゃんが重傷を負ったっていうのは伝わってるのに、治療されて元気になったっていうのは伝わっ

てなかったのかしら？」

「あ～、リンディさん　そのことなんやけど…多分、ヴィータが口止めしてたみたいなんよ」

「ヴィータさんが？　何故かしら？」

「なんでやろうな～？」と疑問を口にしながら、はやてが俺の方をチラリと見る。俺に答えろと言うんだろ。

「俺にヴィータの真意はわからないが、推測は出来る　1、なのはを助けてくれた礼に何も聞かない、という言葉を律儀に守ったから　2、俺の持つ力を、管理局に知らせたくなかったから」

「メリヒムの持つ力…？」

「最初に言っただろう、俺は『錬金術士』　文字通り『錬金術』を使う　なのはを治療したのも、錬金術で精製した薬だ　薬の名は『エリキシル』　『エリクサー』や『エリクシール』などと呼ぶこともある、錬金術士の中でも作れる者はそうはいない、最高峰の薬だ」

『最高峰』と聞き、皆が息を飲んだのがわかった。特になのは。大方、自分にそんな貴重な物を使って良かったの？とでも思っているのだろう。

「気に病むことはない、なのは」

「で、でも…」

「道具は使ってこその道具だ　いくら貴重であっても、使われなければ道具は道具になりえない　お前が考えるのは過去の過ちではなく、これからの未来だろう？　未来のお前が笑って暮らせていれば、俺はエリキシルを使って良かったと思える　だからそういう顔はするな」

「…はい！」

ニコッと明るく元気に微笑むなのは。やはりこの子には笑顔が良く似合う。

ポンッ　ナデナデ

「メリヒムさん　なのはちゃんといちゃついとらんで、話の続き頼むわ」

「にゃっ！？　にゃにを言ってるの！？　はやてちゃん！　わたしとメリヒムさんは、いちゃついてなんかないよ！！」

「ん？　ああ、悪い　つい、な」

「にゃあぁぁぁッ！！？」

今ならなのはの顔でお湯が沸けそうだ。目の錯覚かもしれんが、頭

から煙が立ち上っているように見える。
話が脱線したな。戻すとしよう。

「なのは」

「ふぇッ！？　だ、ダメだよ！？　そういうのは、ちゃんとお付き合いしてからじゃないと！？」

「…何の話をしているんだ？　ヴィータから預かった情報があるだろう？　それを出して欲しい」

「え？　あ…そうだよね！　なにを勘違いしてるんだろうね、わたしは…」

なのはがシュンと落ち込む。先ほどから恭也とユーノの視線が鋭いのだが…何か無礼を働いただろうか？桃子はニコニコ、はやてはニヤニヤ、士郎は何故か物憂げな表情。

なのはの『レイジングハート』（ヴィータの『アイゼン』と同じような物。総じて『デバイス』というらしい）によって、モニターにあの時の映像が流れる。

なのはが刺され、悲鳴があがる。アリサかすずかか、それとも美由希か。断定は出来ないが女性なのは確か。

血溜まりを広げるなのはを、必死になって介抱するヴィータ。そこに俺が介入。そして薬を飲ませたその時、

「き、貴様アァァッ！！」

という叫びとともに背後から刀が振るわれた。冷静に避け、振り切った腕を取り背後に回り込み、関節をキメて無力化する。これが冒頭に記したことの経緯である。

突如起こった出来事に、なのはを筆頭とした子供組が驚いていた。美由希や忍といった恭也に近い人間は、別のことで驚いていたようだ。

「クソッ！　離せ！」

「お前の怒る理由は理解してあるつもりだが、あの時はあするしか手がなかった」

「知るか！　貴様はなのはの『初めて』を奪ったんだ！　死んで詫びろ！！」

酷い言いがかりだな……が、妹を大切に思う心は素直に認めよう。なのはが「は、初めてって、そんな…」とか呟きながらトリップしているように見えるが、大丈夫だろうか？

というか、恭也の所為で口移しのシーンを思い出したアリサやすずかの顔が真っ赤になっている。あれが普通の反応だろう。

「では聞くが、お前はなのはに死んで欲しかったのか？」

「なッ！！？」

「俺がたどり着いた時、なのはは半分死にかけていた　あの状態で如何にして救う手立てがあった？　是非とも参考までに教えてほしいのだが？」

「……ッ」

苦虫を噛んだような顔で悔しそうにする恭也。残酷かもしれないが、聞いておく必要があった。

覆すことが出来ない歴然たる事実を突きつけたことによって、冷静さを取り戻すことが出来ることもある。

頭で納得しても、感情で納得出来ないのが、人間という生き物だ。そしてそのための方法も考えてある。

「それでも俺を受け入れらんないのなら…俺を切るといい」

「な…に……？」

恭也の言葉が詰まり、士郎さんの眉がピクリと小さく動いた。この場に来てから感じていた妙な雰囲気。それが今の一種だけ、僅かに

揺らいだ。

これは士郎の押し殺した闘気…いや殺気といった方が近いかもしれない。この場で士郎は一度も発言していないが、その実、感情に任せて罵倒しないよう口を噤んでいたように思える。

罵倒の矛先が俺がなのはか、あるいは管理局員のリンディかはわからない。けど、間違いなく士郎は道場中全てを支配下に置いていた。

だからこそ俺は士郎に対し、アプローチを掛けた。俺の言葉では聞かなくても、実の親でありおそらく師弟関係である士郎の言葉なら聞くであろう、という俺の目録である。

そして俺の目録通り、士郎が初めて口を開いた。

「聞いても良いかな？　メリヒム君」

「なんだ？」

「何故、キミはなのはを助けたんだい？　なのはと会うのは初めてだし、キミが貴重な物まで使う義理はないと思うんだけど…？」

「医者としての義務、という回答では納得しないのか？」

「では質問を変えよう　キミはなのはに口移しで薬を飲ませた時、何を考えていた？」

「回りくどい言い方は、あまり好ましくない　それよりも、はっきり単刀直入に言えばいい　『キミは覚悟があるのか？』と」

目が細められ、恭也の握っていた刀を士郎が握り、俺の首元へ向けた。あまりの展開に、なのはやフェイト達が焦りの表情をしているのが、視界の端っこに映った。

「なるほど　キミは見た目以上にやるみたいだね」

「士郎のような実力者に誉められるとは、嬉しい限りだ」

「で、返答は如何に？」

「俺は医者でもあるが、1人の戦士でもある　今まで何十、何百と命のやりとりをしてきた　それくらいの覚悟は常に持ち合わせている」

俺の目を士郎がジッと見てくる。多分、ほんの数秒のことだったはず。ふと士郎は首元から刃を引いた。

「ふふふ、どうやらキミの勝ちのようだね　無礼を詫びよう」

「いや、どっちもどっちだろう？　俺は士郎を利用し、士郎は俺を試した　むしろ、こちらが詫びるべきだ」

「そうかい？　ならこのことは水に流すとしよう　互いに、後の禍根は作らないためにもね？」

「そうしてもらえると幸いだ」

ガシッと力強く握手をする。やはり士郎は、かなりの使い手らしい。握手1つとっても、力の入れ方や握手の仕方などで、大体の強さを察することが出来る。

息が詰まる思いをしていた、なのは達が大きく息を吐いていた。だが、俺はこのとき見逃していた。はやてが、イタズラな笑みを浮かべていたのを。

頃合いを見計らい、はやてが全員に聞こえる声の大きさで爆弾を落とした。

「これってドラマとかでよくあるアレやろ？　『お父さん、娘さんをください！』って言う…」

「ほぇ！？」

「メェリィヒィムゥゥ！！！」

恥ずかしさのあまり、ボンッと爆発したなのは。はやての言葉に乗せられ、刀を抜いて切りかかってくる恭也。

フェイトは「え？」と意味がわからなそうにしており、アリサとすずかは「なのは（ちゃん）、結婚するの！？」と興味津々。

桃子&リンディは、微笑ましく見守るのみで、士郎は「メリヒム君

になら、任せてもいいかな」と火に油を注ぐ始末。

…今度からはやてには気をつけるようにしよう。

「あぅぁぅ……えへへ♪」

「「死ねえぇぇぇ！！！」」

「ク、クロノ君まで！？」

第3話（前書き）

今回はメリヒムと高町家のお話。

はやての話し方が激しく不安…

第3話

ゼストＶｉｅｗ

俺はゼスト・グランガイツ。時空管理局・首都防衛隊の隊長だ。周囲の人間達からは『陸のストライカー』などともてはやされるが、そんなことはない。

確かに俺は自分の強さに誇りを持っているし、部下もそんな俺に文句１つ言わずについてきてくれている。が、俺１人では大したことは出来ない。

友であるレジアスが表に立ち、１番の部下であるクイントとメガーヌがいてこそ、俺はこの立場にいると言っても過言ではない。

今回の任務も、友であるレジアスからのものだった。違法研究所の潜入捜査。俺とクイントとメガーヌ、幾多の任務をやり抜いてきた部下達からするば、さほど難しい任務ではなかった。

だからこそ、俺ははっきりと言える。

決して『簡単な任務』という予断は持っていなかったと。

「ガフッ…！」

おびただしい量の血が俺の口から溢れ落ちる。俺の腹は深くえぐり取られていた。目の前の相手は右目を負傷し、完全に視力を失っていた。

戦闘機人ッ…！？ここまで強いとは。部下はほとんど死んだか…途中、分かれたクイントとメガーヌは無事だろうか？アイツらには、帰りを待っているヤツがいるんだ…死ぬなよ。

「ＩＳ『ランブルデトネイター』」

「クッ…！」

戦闘機人によって投合されたナイフが爆発。俺は爆風により、壁を破壊しながら吹き飛ばされた。

ここまでか…

諦めが頭によぎった時、俺の視界に１人の男の姿が映った。その男は俺を見るや、傍に駆け寄ってきた。

「これは…酷い怪我だな　手持ちの物で治せるかどうか…」

この男は俺を治療する算段を立てているようだ。その行動と俺の戦士としての直感が訴えた。この男は信用に値する。

最後の力を振り絞り、男にすがりつくように頼んだ。

「俺は…いい……それ…よりも……俺の……部下をッ……！！」

「…いいのか？　お前は助からんぞ？」

「構わんッ…！　アイツらを……クイントと…メガーヌという女性を……助けて…やって欲しい……頼む…」

「……わかった」

男の了承の言葉が耳に入った。これで2人が現時点で死んでいない限り、助かる可能性が出てきた。なに、俺の部下で1、2位を争う実力を持っている。そう易々とやられるものか。

さて。このまま、ただ朽ちるのを待つも悪くはないが…

「まだ立つのか…あなたのような実力者に、片目1つの代償で勝てたのは僥倖と言うべきか」

「戦闘機人が……もう勝った気か？　俺を…嘗めるなッ！」

我が身命を賭けて！この運命に最後の時まで抗わせて貰おう！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なのはView

昨日はいろいろ大変なことがあったけど、最終的にはお兄ちゃんもお母さんに説得(おはなし)されて、納得してくれた。なんでかお兄ちゃんが怯えてたように見えたけど、どうしたんだろう？

今日も学校だ。ちょこちょこ早退したりしてるんだから、気合い入れないとね！あまりアリサちゃんとすずかちゃんに迷惑かけていられないし…

「おはよう、お母…あれ？　メリヒムさん？」

「ん？　なのはか、おはよう」

いつものように着替えてリビングに向かうと、そこにはいつもと違った光景があった。エプロンを掛けていたのはお母さんではなく、昨日泊まったメリヒムさんだった。

メリヒムさん、エプロンを着こなしてるの……って、そうじゃなくて！

「なんでメリヒムさんが！？」

「手伝いだが……意外そうだな？」

「うん、かなり意外……じゃなくて！？　その…そう！　エプロンがとっても似合ってるの！」

危ない危ない、思わず本音がこぼれてたの……ごまかせた…よね？

ポンポンッ

「そうか、ありがとう」

ホッ。よかった、ちゃんとごまかせてたの。

「男がエプロンを着けるのは、違和感があるよな？」

「特にメリヒムさんのは、ものすごく違和感が……」

にゃあああぁぁぁぁ！！？ハメられたのーー！！！

やっぱり怒ったかな…？ううぅ、怒ってるよね？メリヒムさん、優しいけど怒ったら怖そうだもん…

来るだろう痛みに身を固くしていると、額にコツンと小さな衝撃が

あった。見上げてみれば、メリヒムさんは笑ってた。

「別に怒ってない　それより恭也達を呼んできてくれ　もう出来上がるからな」

「あ、うん」

恥ずかしさで熱を帯びる頬を隠すように、急ぎ足でお兄ちゃん達がいる道場に向かった。うううぅぅぅ…やっぱりあの笑顔は反則だよ…

ちなみに、その日の朝ご飯はとってもおいしかったの。けど、女として負けた気がするの…

「「はぁ…」」

あ、お姉ちゃんとため息がかぶった…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メリヒムＶｉｅｗ

朝食を終えた高町家は、それぞれ動き始めた。なのはと恭也は学校へ行き、士郎と桃子は喫茶店『翠屋』の経営。美由希は学校が創立記念日らしく、今日は休みのようだ。よって、翠屋の手伝い。

さて、俺はどうする…1番の候補は、美由希と同じように手伝いをすること。邪魔になることは決してないはずだ。聞けば、かなり繁盛しているらしい。人手があって困ることはないだろう。

次に周囲の散策。離れた場所に行くとなると、土地勘のある者を連れ添う必要がある。が、近場なら最悪、誰かに翠屋の位置を聞けば良い。

3つ目。地球ではなく、他の場所へ向かう。これは決して無い。まだ、なのはが完全に回復仕切ったかどうか、判明していないのだから。せめて後2、3日は滞在したい。

最後は、マナのケアをする。ここ数日、マナを働かせたからな。出来れば労ってやりたい。

何故そんなことをするか、と？マナはデリケートな存在だ。機嫌を損ねれば、力を貸して貰えなくなってしまう。マナの力が使えない錬金術士は死んだも同然。ただの戦士になってしまう。

「メリヒム君はどうするんだい？」

「マナ達をリフレッシュさせてやりたいが…あまり人目についても不味い」

「まな？」

美由希、なんかアホっぽいぞ…

「……マナとは『この世のあらゆる事象を司るもの　風火地水、光に闇、星や月、感情や精神　様々な種類はあれど元は同じ、つまり純粋な力の塊』のことを言う」

「…随分哲学的なんだな」

「えっと……つまり？」

「美由希、つまりだな　地震や火事、雷といった自然界にあるものだけではなく、音や光なども根っこの部分は一緒で、メリヒム君はその根っこの部分を、いろんなものにいじれる存在ってことだ」

「まあ、なんだ？　妖精や精霊のようなものだと思っていろ」

「なんか、かなりバカにされた気がする…」

士郎の答えは当たらずとも遠からず、といったところ。実際、全錬金術士がマナと契約しているかというと、そうではない。

それに、俺が扱うのはあくまで錬金術。確かにいろいろ出来るが、マナの説明としては些か間違っている。

それでも士郎は順応性が高いというか、目の前の現実をそのまま受

け入れられるようだ。さすが、なのはの父というところか…

「昼間は美由希と共に翠屋を手伝おうかと　人が疎らになる夜にマナをケアしようと思ってる」

「それは助かるね　ウチの店は、ピーク時にはかなり忙しくなるから、人手があると楽になるよ　美由希、メリヒム君に諸々を教えてやってくれないか？」

「はーい、任せて！」

張り切る美由希に手を引かれる俺。普段、あまり人から教わるということはないが、たまには人に教わるのもいいか。

それから美由希に簡単なレクチャー受け、喫茶『翠屋』は開店した。俺は前もって美由希に教えてられていた通り、接客をこなす。こうしてみると、意外に忙しいものなのだな、接客というものも。

ほぼ1日中、受付嬢として働いているアナやフェニルも、やはり大変なのだろう。今度会った時には食事でもご馳走するか。フェニルは、素なのかもしれんがな…

「ねぇ、あの人……新人なのかな？」

「やばッ…めちゃめちゃタイプかも…」

「ちょっと…！　声かけてみたら…？」

先ほどから俺が通る度に、チラチラと視線を送りながらコソコソと話す客が多い。何を話しているかはわからないが…接客が悪かったのだろうか？

逆に視線を送り返してみると、パッと不自然なほどの早さで逸らされてしまう。むぅ…何がおかしいんだ？それとも、何か付いているのか？

「士郎　何故か客が盗み見るようにして視線を向けてくるのだが、俺は何か不味いことをしたのか？」

「ん？　あははは、大丈夫だ　君はどうもしてないから」

？？？…どういうことだ？では何故見られるんだ？

「（視線の送り主は全員女性なんだけど、彼は気づいてないみたいだね　『君の容姿が整ってるから』って言ってもなあ～　彼は気にしたことがないようだし　今度、恭也も入れて２枚看板で売り出してみようかな？）」

士郎がそんなことを考えていたようだが、俺は自分の疑念にいっぱいで全く気づかなかった。

そのうち客で店が忙しくなり、視線など気にしていられなくなった。常に動いている状態だ。一般人にはかなりキツい労働になるが、士郎、桃子、美由希、それに雇われの人間数人（アルバイト）は、笑顔を絶やさずにやっていた。

カランカラン

「ただいまー！」

「おかえり、なのは」

「おろ？　メリヒムさんが働いとる？」

「あ、ホントだ」

午後になり、なのはが学校から帰宅。その時に、フェイト達も一緒にやってきた。どうやらアリサとすずかは結構な常連らしく、士郎や桃子だけでなく美由希もそのような対応をしていた。

「御嬢様方、御注文はお決まりでしょうか？」

「アンタがそうかしこまった対応すると、けっこう様になるわね～」

「そうだね　燕尾服着てたら執事さんに見えるよね？」

「お褒めに預かり、光栄です」

美由希に教わった通りのやり方だが、間違っていなかったようだ。雇われの人間達とは違う対応の仕方だったから、少々不安を覚えていたが…

「（美由希さん　アンタ、とんでもない人間やな…モノホンの執事を持つ人間にお墨付きをもらうとは……グッジョブや！）」

「（燕尾服って、確かスーツみたいなのだよね？　燕尾服を来たメリヒムさん……ぜ、全然違和感ないね！）」

「（うにゃあ…だ、だめッ！　想像すると顔が熱くなるの！）」

むぅ…なのはの顔が赤い。まだ体調が整っていないか？心なしか、フェイトの顔も赤い気がするな。

コツン

「少し熱っぽい…か？」

「ふえぇぇぇぇ！！？！？」

コツン

「フェイトは確実に少し熱っぽいな」

「うぇ！？　だだだ大丈夫だから！！？」

コツン

「なッ！？　なんでわたしにまで！？」

「比較するには、基準となる対象が必要だろう？」

なのは、フェイト、アリサと順に熱を計ってみた。アリサを基準とすると、なのはとフェイトの２人は熱がある。どうやら２人共、体調が悪いようだ。

ただ、熱を計ってからアリサの顔が妙に赤い。アリサも体調が悪かったのか？さっきから視線を送ってくる客も、何故か騒がしい。

「コソコソ…（はやてちゃん…メリヒムさんって天然？）」

「ヒソヒソ…（かもしれへんなぁ…わたしらもまだ付き合いが浅いから、なんとも言えへんよ）」

やはり、俺は何かやってしまっていたのか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なのはＶｉｅｗ

あれからしばらくの間、顔が火照ってすごく困った。だ、だって、おデコとおデコをくっつけると自然に顔と顔が近づくし…わ、わたしはその…キ、キスされちゃってるから……イメージしちゃって…

「〰〰〰〰〰〰〰ッ！！？」

ま、また顔が熱くなってる！？どうしちゃったんだろ、わたし？確かにメリヒムさんはカッコよくて、優しくて、すごくいい人。

だけど、顔を思い出すたびに顔が熱くなって、心臓がドキドキするのって普通じゃないよね？ユーノ君とかクロノ君を思い出しても、全然ドキドキしないもん。

それに、フェイトちゃんやアリサちゃんとメリヒムさんがおデコをくっつけてるとき、なんだかよく分からない感情がわたしの中に渦巻いた。

そんなに大きくなかったから抑え込めたけど…心にもない言葉が口

から出てきそうですごく怖かった。
だからみんなに相談したの。そしたら…
「なのはちゃん、それは恋や！」
「こここここ恋ぃぃ！！？」
「な、なのはちゃん　声が大きいよ」
ハッとしてみれば、お客さんの視線がわたしに集まってた。あぅ…
恥ずかしい…
「はやても、あまり変なこと言わないで」
「変って…ひどいなぁフェイトちゃんは　自分の嫁が盗られたから
って、わたしに八つ当たりしないで欲しいんやけど…？」
「嫁ぇ！？　ち、違うよ！！　わたしはただ、なのはの悩みを真剣
に…」
「はいはい、はやてもそこまでにしましょうね」
ゴンッ！

「イ、イッタァ〜〜ッ！　アリサちゃん、ツッコミがキツすぎるて…」

アリサちゃんのゲンコツが、はやてちゃんの頭に突き刺さった。無防備というか、不意打ちだからかなり痛そうだ。

「なのはちゃん、もうちょっと詳しく聞かせて？」

「う、うん　えっと、普段はそうでもないんだけど…ふとした時に、メリヒムさんの顔を見ると顔がカアァァって熱くなって、すごく心臓がドキドキして…」

「他には？」

「他は…頭を撫でてもらった時に心があったかくなって、微笑みかけられるとすっごく恥ずかしくなる…」

ぅぅ…なんか公開処刑されてる気分なんだけど…でもでも！これで理由がわかれば対策もできるように…

「う〜ん、はやてちゃんの言ったこともあながち間違いじゃないような…」

「いやいや、すずかちゃん　これは間違いなく恋やって」

「そうね、わたしもはやてに賛成　フェイトはどう思う？」

「ぽぉーーーーー…」

あ、あれ？どうしちゃったんだろう、フェイトちゃん？顔が赤くて、目が潤んでて、その視線の先には…

「メリヒムさん？」

「フェイト…アンタ、まさか…！」

「ほえ…？　ちちちちち違うよ！！？　こ、これはけっして好きになったとか、そういうんじゃないから！！！」

うわぁ…見事に自爆したね、フェイトちゃん。って！？フェイトちゃん、メリヒムさんのこと好きになっちゃったの！？

「なのはちゃんとフェイトちゃんの三角関係やね！」

「んもう！　だから違うんだってば！　ただ、クロノと比べてスゴくお兄さんっぽいなぁ、って思っただけだからね！？」

「まぁ、フェイトのその意見には賛成ね……鮫島の後継者にしようかしら？」

「おおっ！　アリサちゃんにもフラグ立ってたかぁ！」

「フラグ言うなあ！！」

ガツッ！

「〜〜〜〜〜〜〜ッ！！？」

さっきのゲンコツと違って、シャレにならない威力だったみたいで、声にならない悲鳴を上げて悶えてるはやてちゃん。まず、音からして違ったからね。

でも、メリヒムさん。まだ付き合いは浅いのに、あっという間にフェイトちゃんとアリサちゃんに気に入られちゃった。すごいなぁ。

「すずかはどうなのよ？」

「わたし？　う〜〜〜ん、まだよくわからないかな？」

「わたしには聞いてくれないんか？！」

「はやては、多分『おもしろい人』とか言いそう…」

「う〝っ…！？　そ、そんなら順番にメリヒムさんを泊めへん？1日一緒に過ごしたら、少しは打ち解けると思うんやけど…」

はやてちゃん、図星だったんだ。みんなわかってるよ。目が呆れてるもん。

だけど、はやてちゃんの意見は賛成かな。フェイトちゃん達だけじゃなくて、シグナムさんやリンディさん達ともお話しておいた方が、色々都合がいいと思うんだ。

みんな、はやてちゃんの意見に賛成で、ジャンケンで順番を決めた。わたしは1日泊めてるから、自然と最後になった。

順番はすずかちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、わたしの順番。けど、順番を決めてから気づいた。肝心のメリヒムさん本人に、了解をもらえてなかった。でも、杞憂だったみたい。

「俺は別に構わない　むしろ有り難い、と　様々な場所を見て回ろうと思っていたからな」

なんと、あっさり了解の返事をもらえてしまった。ビクビクしながら聞いたのが、バカみたいに思える。

というわけで、明日から順番にメリヒムさんがお泊まりすることになった。

うーん、なんとなくだけどイヤな予感が…

第４話（前書き）

メリヒムｉｎ月村家

作者の最近のマイブームワードは「切羽詰まってる」です。

第４話

メリヒムＶｉｅｗ

急遽決まった宿泊先の変更。俺としては、なのはの経過を見るための滞在なので、すぐに向かえる場所にいれればどこでも良かった。

だが人間とは欲深いもので、慣れてくるともっといろんなものを見てみたい、と思うようになる。俺もその例に漏れなかったようだ。

ひとまず世話になった高町家に別れを告げ、今日は月村家に行くことになった。恭也のガールフレンドの忍と、その妹のすずかがいるところだったな。

彼女らにはどうやら他言無用の秘密があるようだ。本人達に聞かずともわかる。その理由は、後々明かすことになるだろう。

俺は恭也に連れられ月村家へとやってきた。いや、『月村家』よりも『月村邸』と言った方がいい。かなり大きい屋敷だった。

「いらっしゃい恭也、メリヒム君」

「１日世話になる」

「来てもらって早々で悪いんだけど…ノエル、メリヒム君を着替えさせてくれる？」

忍と2人のメイドに出迎えを受けたかと思うと、早速メイドの1人に連れてかれ、服を着替えるように促された。

こちらとしては世話になる身。多少の要求は飲まねばならない。だが…

「燕尾服？」

「うんうん、アリサちゃんや美由希の言った通りね　やっぱり似合うわ」

「すまん、メリヒム…こうなった忍は止められない」

何故俺が、燕尾服を着ることになったのだ？別に着るのがいや、というわけではないが…目的が見えない。

「この服で生活しろ、と？」

「概ね当たりよ　メリヒム君には今日1日、すずかの執事をやってもらうわ！」

「…了解した　しかし、いくら俺でも執事経験はないのだが…」

「その点は大丈夫　基本は、ノエルやファリンの手伝いとすずかのお世話だから、あまり難しく考えなくていいわよ？」

俺を連れてきた方ではない方のメイドが、俺の指導係というわけだ。昨日今日と、教わる側に回るとはな…なかなかどうして、新鮮な気分じゃないか。

む、１日ここで過ごすのならば…

「忍…御嬢様、少々許可が欲しい事柄があるのだが…」

「何かしら、見習い執事のメリヒム君？」

俺の頼みを、忍は快く了承してくれた。これだけ広い敷地があれば大丈夫だろう。アイツらもここならば、心置きなく羽を伸ばせるはず。

さて、まずは掃除か。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

すずかＶｉｅｗ

昨日決まった『メリヒムさんの素顔を明かそう大作戦（はやてちゃん命名）』で、今日はメリヒムさんが、わたしの家に来ることになっている。

お姉ちゃん、メリヒムさんに、とんでもないことしてないよね…？メリヒムさんが来ることを教えてから、妙にテンション上がってたから不安で不安で…

「どうしたの、すずかちゃん？」

「あ、なのはちゃん　お姉ちゃんがメリヒムさんに、失礼なことしてないか心配で…」

「にゃはは、大丈夫だよ　今日はお兄ちゃんも一緒に行ってるから、いざというときはちゃんと止めてくれるって」

「うん、ならいいんだけど…」

なのはちゃんは知らないんだ…恭也さんがお姉ちゃんの前では弱腰なのを…もし知られたら、お兄さんとしての面子、丸つぶれだもんね。

そんなわたしの不安をよそに、時間は流れに流れて放課後。

「メリヒムさん、どうなってるんやろ？　めっちゃ気になる～！」

「そうね…まあ、確実に執事にはされてるでしょうね　今朝、忍さんから電話あったのよ　『どんな服が似合うかしら？』って」

お姉ちゃん…やっぱり、失礼なことしちゃってたんだね。うぅ…メリヒムさん、嫌わないでいてくれるといいんだけど…

下駄箱で外靴に履き替え、校舎を出る。いつもなら、校門を出てすぐのところに車が止まってるはずなんだけど…

「あれ？　今日はノエルさんも鮫島さんもいないね」

なのはちゃんの言うとおり、今日は車が止まっていなかった。何かあったんだろうか？まさか、メリヒムさんを弄ってて忘れてる？いや、そんなことないよね。

わたしが異変の理由考えていると、下校する生徒達の流れに逆行する黒い服を着た人がいた。あれって…？

「メリヒムさん？」

「御嬢様、お迎えにあがりました」

燕尾服を着用したメリヒムさんだった。なのはちゃん達は、ビックリしちゃって声が出てない。わたしだってビックリだよ…！

きっとお姉ちゃんに着せられたんだろうな…けどメリヒムさん、ちゃんと着こなしてる。本物の執事さんみたい。

「御嬢様？」

「え…あ、メリヒムさん　そんな御嬢様なんて呼ばなくても…」

「そうなのか？　忍から『わたしと違って、すずかはお姫様に憧れてるから、姫って呼んであげて』と聞かされていたが…」

きっとメリヒムさんは、外だから自重して『姫』から『御嬢様』にランクを下げたんだろうな。よかった……本当に姫なんて呼ばれてたら、明日から恥ずかしくて学校行けなくなるところだったよ…

「すずか、でいいですよ　主従関係より友人関係の方がいいので」

「わかった、すずか　この後の予定は？」

ん～どうしよう？今日は習い事もないし、塾もお休みだ。だから予定と言われても…

「すずかちゃん！　今日、すずかちゃんの家に行ってもええ？！」

「う、うん　大丈夫だけど」

「よっしゃ！　ならこのあと、みんなですずかちゃんの家に行かへん？」

はやてちゃんの急な申し出に驚いて、勢いで頷いちゃったけど大丈夫だよね？と、メリヒムさんに視線を送ると薄く微笑んで頷いてた。

あ……今わたし、メリヒムさんと目で通じ合った？なんか不思議な感覚……いやじゃないけど、なんか恥ずかしい…

「じゃあ、わたしは先に帰ってるね？」

「御嬢様方のお越し、心待ちにしている」

メリヒムさんがそう言い残して、わたしの数歩後ろにつく。お姉ちゃん、メリヒムさんに執事のやり方まで教えたんだ。

でも……メリヒムさんみたいな執事さんだったら…いてもいいかな…？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

はやてＶｉｅｗ

すずかちゃん家にやってきたで～！相変わらずおっきな家やな～

「さっきのメリヒムさん、すっごく執事らしかったね～」

「うん、全然おかしいところなかったよね」

「まあ、初日にしてはなかなか様になってたわね……真面目に鮫島の後継者にしようかしら？」

「アリサちゃん、心の声が漏れてる漏れてる」

みんな、すっかりメリヒムさんの虜になっとる。確かに顔はええし、優しい人や。けどわたしらはまだ、メリヒムさんについて何も知らへん。

局でもユーノ君が無限書庫で調べたり、メリヒムさんが言うとった『ゼー・メルズ』ちゅう街らしき名前もヒットせぇへん。『錬金術士』がどんな存在かもわからへん。まさに謎の人間や。

聞けば、教えてくれるかも知れへん。でもそれは、向こうの許容出来る程度の情報しか手に入れられへんということや。教えて困ることまでは、さすがに教えてくれないやろし…

「はやて、どうかした？」

「わたしら、メリヒムさんのこと何も知らんなあって」

「「「えッ……？」」」

なんや、3人そろって驚いたような声出して。わたし、そんなおかしいこと言うた？

なのはちゃん達3人はわたしに背中を向けると、顔を近づけあってコソコソと話し始めた。

「はやてちゃん、メリヒムさんと何かあったのかな？」

「だよね　じゃないと、はやてがメリヒムに興味持つ理由がないよね？」

「もしかしたらはやて、メリヒムのこと好きなんじゃ…」

「「ええッ！！？」」

「ちょっ！？　待てーーい！！？！？」

聞こえとるからな！？コソコソ話してたつもりかもしれへんけど、丸聞こえやからな！？だから3人共、そんなに驚かんといて！！

グワシッ！

「はやて、正直に言いなさい…？　アンタ、メリヒムと何かあった？」

アリサちゃん！手ぇッ！肩を掴んでる手がくい込んで、むっちゃイタい！！

なのはちゃん！レイジングハートの先端を向けないで！！フェイトちゃんも、バルディッシュの刃を首筋に当てんといて！！？

「ななないで！！　なんもない！！！」

わたしの必死な物言いに、アリサちゃんは怪しみながらも手を放し、なのはちゃんとフェイトちゃんはホッと胸をなで下ろしていた。ふっふっふ、この怨みはらさでおくべきか…

「なんや？　なのはちゃんはともかく、アリサちゃんもフェイトちゃんもホレたんか？」

「ほッ！？　だだだだ誰がホレたですって！！？」

「そそ、そうだよ！？　まだ、わたし達にはそういうのは早いよ！」

「はやてちゃん！？　わたしはともかくってどういうこと？！」

う～ん、きっちりフラグ立ってるみたいやなあ～。この調子だと、わたしとすずかちゃんにもフラグ立つんやろか？

……アカン！そんなこと考えてたら、本当にフラグ立ってまう。すずかちゃんはどうなんやろ？

リンゴーン

ドタドタドタ！

バタバタバタバタ！

ガッ！

ゴロゴロゴロゴロ！

ガッシャーン！

す、すずかちゃん家のインターフォン…おもしろい音やなあ～

「さすがお金持ち…意味のないところにもお金掛けるんやな～」

「現実逃避しない！　今のは絶対にファリンがドジった音でしょうが！！」

アリサちゃんがわたしを現実に引き吊り上げてくれた時、恐る恐るドアが開けられた。開けてくれたのは、ドジっ子ファリンさんじゃ

なくて、クールビューティーノエルさんの方やった。

「あ、皆さまでしたか。本来ならお迎えにあがるところ、申し訳ありません」

「いえ、それは別に…あの～今の音って…」

なのはちゃんがさっきの音について尋ねると、2階の方が未だバタバタと騒がしいことに気がついた。そういえば、メリヒムさんの姿がないなぁ。

ま・さ・か…

そう感づいた時、2階から人影が飛び出してきた。1人は、なのはちゃんのお兄さんである恭也さん。もう1人は、バラの花びらみたいな真っ赤で、スカートがフワフワしたドレスを着たお姉さん。顔は見たことあらへん。

恭也さんの手には2本の木刀が握られてたところからして、あのお姉さんを取り押さえようとする恭也さんってところやな。

2階から飛び降りて問題ない恭也さんも大概やけど、あのお姉さんもすごいなあ～恭也さんの剣をヒョイヒョイかわしとる。

「大人しくしてくれ！」

「いい加減にしろ…これ以上付き合えるか」

「そう言わずに！　今、お前がいなくなったら…俺が忍に殺される」
「諦めろ、あれはお前と夫婦（めおと）になるのだろう　俺を巻き込むな」
俺？あのお姉さんが俺やて？しかもこの声、どこかで聞いたことあるような…？
わたしが疑問を浮かべた時、お姉さんが動いた。
「往生際が悪いぞ、恭也　潔く死んでこい　ジフトス！　アロマ！」
名前らしきものを叫んだかと思うと、お姉さんの前に2人（？）の女の子が現れた。片方は黒いドレスの子、もう片方は肌が赤い子。両方とも宙に浮いていた。ああ、なるほどなぁ～大変やな～あの人も。
「ちょっとー！　ゆっくり休んでてよかったんじゃないの！」
「全く…仕方のない人　わたしがいないとなんにも出来ないの？」
「愚痴はあとでいくらでも聞いてやるから……今はさっさとアイツを落ち着かせろ」
なんかあの子ら、怒ってる？そもそもあの子らは何なんやろ？魔法

なんか？それにしては、人格がしっかりし過ぎとるような…

ま、それは一旦置いといて…恭也さんが突っ込んでくるのに合わせるように、呼び出された子らが動いた。

具体的に言うと、黒い子の周囲に紫色の煙が渦巻いて、赤い子の辺りで煙が消えとる。一体何するつもりや？

「眠れ、微睡みの香」

お姉さん（？）が呟くと、あら不思議。今の今まで起きとった恭也さんが、急にバタッと倒れ、ぐーすかと寝とった。

あの子らが何かをしたみたいやけど、何をしたのかはわからへん。その辺は追々聞けばいいか。

お姉さん（？）が、沈黙した恭也さんを見て安堵の息を吐くと、慌てた様子のすずかちゃんがやってきた。

「メリヒムさん！　大丈夫だった？！」

「「「メリヒム（さん）！！？」」」

あ～やっぱりそうやったか。まさかとは思っとったけど…こんな美人さんになるとはな～シグナムと並べたら、アイドルとして売り出せるんちゃうか？

ん？今、どこからか『あ、主…それは…』って言うシグナムの声が聞こえたような…気のせいやな。

「あ～あ、恭也やられちゃったの？」

「お姉ちゃん！　メリヒムさんにあんまり迷惑かけちゃダメ！」

「…着替えてくる」

「えー！！　カワイイのに…　ねぇ？　なのはちゃん達もそう思うでしょ？」

忍さん…わたしらに振らんといて……忍さんの方からは見えへんみたいやけど、メリヒムさんの目…めっちゃコワいんや…

「ファウスタス」

メリヒムさんが喚んで出てきたのは1匹の獣。なんやぬいぐるみみたいな子やな～というかメリヒムさん、他に何人いるんやろ？

その子が忍さんの足元に行き、フーッと息を吹きかけたように見えた。すると、どうだろう？不意に忍さんが笑い始めた。

「メリヒムさん、お姉ちゃんになにしたの？」

「幻覚と幻聴をかけただけだ　ついカッとなってやった、後悔はしてない」

ちょっ！？待って！！なんでメリヒムさんが、そんなネタみたいなこと言ってるんや！！？意味わからんようになってるんやろ！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メリヒムＶｉｅｗ

あの後は忍が復活するまで平和だった。庭でお茶会したり、やたら多いネコとじゃれたりと、まさに平和そのものだった。

その間も俺は執事としての仕事をこなした。お茶を用意し、買い物を手伝い、夕食を用意した。夕食の味は皆に好評だったと言っておこう。

そして今は夜。既にかなり更けている。俺はあてがわれた部屋でマナ達と話していた。

ふと魔力のような、別物の力が発現したのを察知した。なんだこの感覚は？強いて言葉にするなら、命の力が強まったような…そんな感じだ。

すぐさま俺は部屋を出て、その力の根源へと向かう。この方向は…
すずかの部屋か？

そして俺の考えは当たり。目の前にはすずかの部屋への入り口。ということは、この感覚の発生源は必然的に…

コンコン

「すずか、起きているか？」

…返答はないが、なにやら苦しんでいるらしい。荒い息づかいが扉越しにも聞こえてくる。

「…入るぞ」

ガチャッ

部屋の中では、すずかがベッドの中で苦しい息づかいをしていた。
ただ…部屋中に、何らかの匂いが充満している。香水か？女性らしいと言えばそれまでなのだが…それだけか？

ひとまず、すずかの様子を確認することにした。

「すずか、大丈夫か？」

「……メ……ぅ」

うなされてるのか？そう感じ、様子を窺おうとしたその時、

ガバッ！ガシッ！

「す…ずか……？」

「ぁ…ぁぁ……ぃや…」

突然起き上がったすずかに抱きつかれ…いや、掴みかかれた。抵抗は出来ない。すずかの力が強すぎるためだ。この力は…異常だ。

目は虚ろであり瞳孔が開いている。酷く動物的な目だが、はっきりとした意志も感じる。

どうする…？ヒーリングを掛けるか？それとも意識を飛ばしてやった方がいいのか？まだ、判断出来ないな…『純粋な人間でない』故に、原因がわからないままでは下手に手出し出来ん。

「どうした？　恐ろしい物でも見たか？」

「ちが……ぅあ…」

どうやら何かしらの衝動か、もしくは本能のようなものを抑えているらしい。全身の筋肉が強張り、ブルブルと痙攣でも起こしたかのように震えている。ならば…抑制しているものを解放してやれば…

「よく頑張った、今助けてやる」

「ぁ…ぁ……やぁ…ぁ」

「恐れるな、今の自分を受け入れろ　大丈夫、俺はすずかの執事だ主の意に背くことはしない」

「いやぁ……いやぁ…ッ！」

俺の言葉を聞き、少しずつ、少しずつ、俺の体がすずかの方へ引き寄せられる。いくら強靭なすずかの理性でも、長時間本能を抑制していたために限界がきている。

迅速に本能を解放させるため、俺はすずかを抱き上げた。顔は既に涙でぐしゃぐしゃだ。俺はすずかの耳元へ口を持っていき、優しく諭した。

「もう苦しまなくていい　俺が全部受け取ってやる」

「…ぁ…あぁッ！」

「ッ！？」

一際大きい声を上げたすずか。俺の首筋が熱を持ったのは、そのすぐあとのことだった。同時に屋敷の中が騒がしくなってきた。すずかの上げた声を聞きつけた忍達だろう。

俺は忍達が来るまでの数分間、すずかのなすがままにされた。首筋に噛みつかれ、すずかの小さな舌が這い、血を吸わせる。この、優しくも強い芯を持った子に背負わされた、重い運命を怨みながら…

ようやくすずかの興奮が冷めた頃、忍やノエル達に話しを聞かされることとなった。大体は予想がついてるがな…

すずかは俺の膝の上で、俺に抱きつくようにして泣きじゃくってる。俺に対して申し訳ないといったところか。

首の傷は、回復魔法であるヒーリングで既に癒やしてある。毒性はないと思うが念のため、キュアもかけておいた。出血も、それほど酷いものでもなかったからな、問題ないだろう。

「今更隠しても仕方ないから、はっきり単刀直入に言うわ　私達には吸血鬼の血が流れてるわ」

「吸血鬼の子孫…ということか？」

「そう、わたしよりすずかの方が血は薄いんだけど…まだ子供だか

ら、時折来る吸血衝動を抑えきれないの」

なるほど…吸血鬼な。だから首筋に噛みつかれたのか。舌を這わしてたのは、漏れ出した血を舐めていたため。これで、あの妙な感覚の原因も納得した。

「すずか、いい加減泣くのはやめないか？」

「だって…ヒッグ……メリヒムさんは……イッグ…わた…しに優しく……してくれたのに……」

はぁ、頭が痛い…すずかは、まず前提からして間違っていることに気づいていない。もしかすると、忍も気づいていないかもしれない。

「あのな…俺は錬金術士だ　こちらの人間とは価値観が違う　それに俺は元々、忍とすずかが純粋な人間でないことを知っていた」

「「え…？」」

驚きのショックで、すずかはようやく泣くのをやめた。やめたというよりは止めただな。自主的にやめたわけではないのだから。

とりあえず、これで話せる状態になった。どうやら、全てを言葉にしなければならないらしい。

「知ってたの…？」

「吸血鬼云々は知らないが、純粋でないことだけは…な　だから俺にとって、吸血鬼行動とかそんなものはどうだっていい」

「でも……気持ち悪くないの…？　その……わたしみたいな存在が近くにいて…」

「俺の周りには沢山いる　獣人、半人半妖、マナもそうだな　全員、出てこれるか？」

俺が声をかけると、俺と契約しているマナ達が全員出てきた。今まで喚んだマナは『命のマナ　アイオン』『毒のマナ　ジフトス』『薫のマナ　アロマ』の3体。まだ喚んでいないマナと合わせると今現在、俺と契約しているマナは総勢8体になる。

それだけの数のマナが現れるとなると、さすがに驚き過ぎて反応出来なくなるか。今日一日、行動を共にしてほとんど表情を崩さなかったノエルでさえ、開いた口が塞がらないと見える。

「コイツらは俺と契約したマナ達　マナは、精霊や妖精のような存在だと考えてくれていい」

「また主は女を引っ掛けたのか？　妾がいるというのに…」

「全く…仕方のない人　盛りのついた犬みたいに、次から次へと女に手を伸ばして…」

「もういっそのこと、もいだ方がいいんじゃなーい？」

アイオン、ジフトス、アロマとここ最近喚び出したヤツらが、ここぞとばかりに口撃してきた。コイツらは……特にアロマ、ナニをもぐつもりだ？

「アイツらの言うことは信じるな　すずかに嫉妬してるだけだけだ」

「嫉妬……あぅ…」

すずかがボフンッと音を出して顔を赤くする。自分の状態を意識したら、恥ずかしくなったようだ。

「すずかに吸血鬼の血が流れていつも、すずかはすずかだろう？言葉でコミュニケーションが取れ、感情を表現出来て、心があるだからすずかは人間だ」

「うん……ありがとう…メリヒムさん…」

せっかく泣き止んだのに、また泣き出してしまった。……涙の種類が違うのだから、良しとするか…忍もどことなくホッとした様子。が、すぐさまイタズラな笑みを浮かべる。

「あ、そうだ　あのね、メリヒム君　私達一族の掟で、正体を知られちゃった人に対する契約みたいなのがあるんだけど…」

「お、お姉ちゃん…！！」

「どんなものだ？」

「平たく言うと、すずかの夫になるか？　それとも生涯の友でいるか？　どっちかを選びなさいっていうものよ」

なるほど、契約を結ばねば口封じせざるを得ない。どちらかを選べば、友好関係によって話すことはない…というわけか。それならば…

「俺は生涯の友であることを『一時的に』約束しよう」

「ん？　どういうこと？」

「すずかの心はまだ若い　ここで夫婦の契りを結んだが故に、辛い思いをすることになるかもしれない」

すずかの人生は俺よりも長い。『俺』というものを背負うには、まだまだ経験が足りない。そんな身で、俺に縛り付ける気にはなれない。

「もしかしたらこれから何年かの間で、本当に好きな人が出来るか

もしれない　仮に今、俺のことを好いていても、大人になった時も好いているかはわからない　だから『一時的』だ」

「もし……わたしが大人になっても、メリヒムさんのことが好きだったときは……」

「それはそうなってから考えればいい　尤も、すずかのような人と一緒になるのは吝かではないが…」

恥ずかしそうに、赤くなった顔を隠すように俺の胸に顔を埋めるすずか。そのうち、安心した表情で寝てしまった。

俺はすずかをベッドに運んだのだが、しがみついたまま寝てしまったためにすずかの手が離れない。むぅ…仕方ないか。

俺はそっとベッドに潜り込み、すずかと共に寝ることにした。久々に感じる人肌に安堵感を感じながら…

第5話（前書き）

今回はｗｉｔｈフェイト

途中までアルフの存在を忘れるという大失態…！

第5話

すずかＶｉｅｗ

窓から差し込んできた朝日が、顔に当たったことよって目が覚めた。
うぅ～ん……はれ？わたしいつの間に寝たんだろ？

確か昨日…ううん、夜中だね。メリヒムさんに、わたしたち姉妹の秘密を話して…でも、メリヒムさんは最初から知ってて…受け入れてくれたんだよね。

掟のことも、わたしを思って生涯の友と言ってくれたし…本当に優しい人だよね、メリヒムさんは。ししししかも……わたしと…その……ふふぅふ夫婦になるのも悪くないって…恥ずかしいなぁ…

もしかして、わたし……メリヒムさんのこと、好きになっちゃったのかな？心臓がすごくドキドキいって、胸がキュンとなって…なのはちゃんが言ってたのにそっくり…

ふふふ、そっか……これが恋なんだね。なんかフワフワして、こそばゆい気分。なのはちゃんには申し訳ないけど…わたしも参戦させてもらうね？

さて、今日も学校に行かないと……あれ？体が動かない？
それにお布団とは違う、なにかあったかいものに包まれてるような…

「スゥ……」

「…ッ！？（ビクッ！）」

え？え？なんでメリヒムさんが一緒に寝てるの？！それにメリヒムさんが、わたしを抱きしめるように背中で手を合わせちゃってるから、抜け出そうとしても抜け出せないし…

と、とりあえず起きてもらわないと…

「メリヒムさん　起きて、朝だよ」

「もう起きている」

「ひゃわあぁっ！！？」

ビ、ビックリした～！まさか起きてたなんて…でもそれなら、なんで先に起きてなかったのかな？

「っと、やっと起きたか…」

「やっとって…まだ６時なのに……どれくらい前に起きてたんですか？」

「…1時間半くらい前か？　空の明るさから考察した予測だから、多少は前後するだろうが…」

「そんな前から…なんで起きなかったんですか？」

「……」

あ、あれ？黙っちゃった。なにかマズいこと言った？

「……起きれなかったんだ」

「起きれなかった？？」

「そうだ、すずかが俺の服をガッチリ握ってたからな…同じベッドで寝たのも同じ理由だ」

そう言われ、わたしは寝る間際のことを思い出した。そうだ、メリヒムさんに『すずかは人間だ』って言われて、安心したら眠くなっちゃって、そのまま寝ちゃったんだ。

ってことは…

「まぁ、俺も人肌を感じながら眠るのは久々だったからな…それにすずかの寝顔も見れて、結果的には得だったか」

「～～～～～～～～～～～ッ！？！！？」

メリヒムさん……このタイミングでそのセリフは反則だよ…絶対にわたしの顔、真っ赤になってるよ…

うぅ……もう清楚って言えない気がする。だって…わたしが自分からメリヒムさんを誘ったような形だもん。

わ、わたし…メリヒムさんになにもされてないよね…？べ、別にされてもいいけど……ってそうじゃなくて！？

「……きゅぅ…」

「…手間のかかる御嬢様だ」

わたし…学校に間に合うかな…？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メリヒムＶｉｅｗ

「お願い、メリヒム」

「…今回だけだ」

すずかを無事に学校へ送りつけ、俺は見習い執事の任を解かれた。その時のすずかは、非常に残念そうな顔をしていた。どうやらかなり懐かれたようだ。

その後、一度翠屋に立ち寄り、フェイトの家にお邪魔するつもりだったが、学校を逆走しているフェイトが視界に入った。

なんでも急な任務が入ったらしく、すぐに向かわなければいけなかった、と連れてこられてから聞かされた。

というのも、フェイトは俺の姿を見るや、俺の手を掴み、その歳からは想像出来ないスピードで駆け抜けたが為。悔しいが…口を開く余裕すらなかった。

そして俺は今、アースラという大きな船の中でフェイトに願い請われていた。フェイト1人でも問題ない任務らしいが、フェイトの義兄であるクロノが俺に同行するよう提言してきたが故にだ。

クロノが俺に同行を求めたのは、おそらく俺自身の実力を計りたいためだろう。どうやら未だ、錬金術士についての情報が少ないようだからな。

俺としても、一度こちらの魔法を間近で見るいい機会かもしれない。フェイトは結構な実力者のようなので尚更だ。

話がついた俺は、フェイトの後に続き『転送魔法』とやらで飛ばされた。これは、一瞬で他の場所へ行き来する物らしい。

目の前に広がるのは鬱蒼とした深い森。人が立ち入るような場所ではないな。

「で、ここで何をするんだ？」

「えっと…この先にあるキャンプで現地生物が暴れてるから、追い払ってキャンプを奪還せよって」

キャンプ…こんな深い森でか？何らかの調査だろうか？俺には知るよしもないがな。

ズズゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！！

「急いだ方がいいらしいな…」

「うん、わたしが先行するからついてきて」

程なくしてキャンプであろう場所に着いた。というのも、キャンプの道具が至る所に転がっているので『あろう』という表情になった。

この事態を引き起こした主は未だ、キャンプの中心で暴れている。なのは達の世界の『バス』という乗り物に匹敵しそうな大きさで、鋭い爪と鈍光が反射する鉄のような毛並みを持っていた。

キャンプにいた人間から話しを聞くと、あの生き物はいきなりやってきて暴れ始めたらしい。普段は大人しい生物なので、暴れる理由がわからないという。

「どうするんだ、フェイト？」

「この惑星は自然保護区だから、なるべく穏便に済ませたいんだけど…」

言葉に詰まるフェイト。それもそうだ。理性の欠片も残っていないような生物相手に、穏便に済ませられる手があるはずもない。

この森を一刻も早く救うのなら、ヤツを退治するつもりで攻撃するのが一番の手だ。ヤツが暴れる原因がわかれば、元に戻せるかもしれないが…

「おい、キャンプにいた人間はここにいる者で全員か？」

「え、ええ…確認はしていないので、おそらくですが……」

そう答えた人間に、俺は言いようのない違和感を感じた。いや、違和感そのものは、ここに来た時から感じていた。

この違和感が示すその先にあるものは…

「ひとまず威嚇してみて、それでもダメなら少しダメージを与えてみようと思うんだけど…どう？」

「何故、俺に聞く？　フェイトの思った通りにやってみればいい」

「うん、わかった　メリヒムには負傷者の手当てをお願いしたいんだけど…」

「遠慮せずに命令すればいい　今の俺は、フェイトの部下のようなものなのだからな」

「じゃあ、お願いするね　いくよ！　バルディッシュ！」

フェイトが金色の光を纏うと、かなりの速さで目標へ向かって飛んでいく。俺はフェイトに言われた通り、負傷者の手当てに回る。

…少し、探りを入れてみるか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

フェイトＶｉｅｗ

わたしの目の前には、わたしの身体の何倍もある現地生物。言葉で

表すなら、アルフやザフィーラの獣モードをおっきくしたような感じ。でも、あの2人よりもっと凶暴だと思う。

不謹慎だけど、なのはと初めて会ったときを思い出しちゃうな。あのときは大きくなったネコで、今回は大きな犬（？）。

なんか新しい人と会う度に、動物が関係しているような気がする。自分でも、つくづく不思議な縁だと思う。

おっと、いけない。今は早くあの子を大人しくさせないと…

「プラズマランサー、セット」

最初は威嚇だから、傷つけないようあまり魔力を込めないで…

「ファイア！」

4発のランサーが風を切り裂いて放たれる。当てる場所は四肢。そこなら当たっても、内蔵にダメージはいかない。

カカカカンッ

「は、はじいた！？」

プラズマランサーが、灰色の毛皮にはじかれるようにして地面に着弾する。毛皮じゃなくて鎧だね、あれは。

でも、初手はだいたいそんなもの。射撃魔法の威力じゃ、はじかれちゃうことがわかっただけでも十分だ。

「バルディッシュ！」

［Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ］

なら直接攻撃はどう？魔力がはじかれても、衝撃までは殺せないはず。痛みにビックリして、逃げてくれればそれでよし。

使い慣れた加速魔法――――ソニックムーブで急速接近。死角になる背後から、頭頂部を狙って、アサルトフォームのバルディッシュを振り下ろす。

ピクッ……シュタッ！

「なっ！？」

けど、動物特有の危機察知能力と俊敏さでよけられてしまう。今まで無差別に暴れていた瞳にわたしが映る。マズい！早く離脱しなきゃ！

すぐにその場を離れると、鋭い爪が目の前を過ぎ去った。危なかっ

た…あんなのもらったら、防御の薄いわたしはシャレにならないよ。あれだけ速いと砲撃はムリかな？溜めてる間に近づかれちゃう。なのはみたいに、固い防御があれば別なんだけどね…

やっぱり直接攻撃しかないかな。大丈夫、最近はシグナムと互角くらいに戦えるようになったんだから。勝率は、わたしの方がまだ低いけれど…。

「ハァッ！」

ソニックムーブで相手を攪乱しつつ、時折接近。バルディッシュによる直接攻撃を仕掛ける。いわゆるヒット&アウェイ戦法だ。スピードが持ち味のわたしには、けっこうハマる戦い方。

わたしの中で接近戦最強のシグナムでさえ、捉えるのが苦労するスピードなのに、この獣はそのスピードについてくる。

どうしよう？ソニックフォームでさらにスピードを上げる？でも、それにまで対応されたら？ザンバーを使う？確かにリーチが長くなるから当てやすくなるけど、まだハーケンフォームみたいに使いこなせてない。

「ぁ……」

考えたのがよくなかった。考えちゃったせいで、注意が散漫になっ

て、とっさの行動がとれなくなっていた。
気がついたら、大きな前脚が正面から振り下ろされる直前だった。
わたしは驚きに身を固くして、動くことができなかった。
かすり傷程度じゃあすまないな…もしかしたら死んじゃうかも……
脅威が目の前にあるのに、けっこう冷静だね、わたし。
ガギギッ！
金属をひっかくような音が聞こえると同時に、わたしの体が飛行魔法とは別の力によって引っ張られた。
「執務官とやらを目指す人間が、その程度でどうする？」
「え？」
…メリヒム？って顔が近い！？わたし、抱っこされちゃってるよ！！？
「あぅ……メリヒム…降ろしてくれないかな？　その…恥ずかしいんだけど…」
「…俺からしてみれば、フェイトの姿の方が恥ずかしいと思うが？」
うぅぅ…クロノ、ユーノときて、メリヒムにまで言われちゃった…

やっぱり変えた方がいいのかな？

「はぁ…フェイト、下がってろ」

「あ、うん　でも…大丈夫？」

「問題ない　たかが茶番劇　終わらせるくらい、俺にだって出来る」

茶番劇？どういうこと？

聞こうとしたら、現地生物がメリヒムに飛びかかっていた。

「ディエメア！」

メリヒムが叫ぶと、どこからともなく岩の塊みたいな生き物（？）が現れた。見た目は、サイみたいな感じかな？ツノが2本あるし。

「ヤツを止めろ！」

メリヒムの命令を受けたディエメアさん（？）が、ものすごいスピードで現地生物に体当たりした。相手が魔法をはじく、鎧のような毛皮を持っていようが、岩の塊の直撃に耐えられるはずもない。

「ジフトス！　ドゥル！」

前にすずかの家で見た子――ジフトスちゃん（？）でいいのかな？と緑を基調とした服に、同じく緑が基調で、真ん中に星マークがついてる帽子をかぶった男の子が現れた。

ジフトスちゃんは、大きな針みたいなものを現地生物に突き刺し、ドゥル君（？）が手をかざすと、辺りの木々や草がまるで意思を持っているかのようにうごめき、現地生物を縛り上げた。

縛られた現地生物は毒を受けたようにピクピクと痙攣し、身動きがとれなくなった。スゴい！これがメリヒムの力……。

「そろそろ止めにしないか？　これ以上は無駄だ」

止めに？そもそも、誰に向かって言ってるんだろ？

「見ているのだろう、クロノ・ハラウオン！」

クロノ？……もしかして…これはクロノが仕組んだことなの？

わたしの中でバラバラだったピースが繋がっていく。メリヒムの任務同行。キャンプの中央で暴れていた現地生物。キャンプにいた人達の様子。メリヒムの茶番劇発言。確たる証拠があるわけじゃないけど、多分間違ってない。

その答え合わせはすぐに出た。アースラの通信回線が開かれ、クロノがモニターが映ったからだ。

《驚いたよ…いつから気づいていたんだ？》

「最初から違和感は感じていた　確信を得たのは、フェイトが攻撃を仕掛けた時だ　最初に魔法を放った時、あの獣は魔法をはじいた　その時、キャンプにいた1人の人間とあの獣の間に、魔力の繋がりを感じた」

《なるほど…現地生物なら、キャンプにいる人間と繋がりを持つはずがない　正直、そんなことでバレるとは思わなかったよ》

「そういう予断を持って事に望むと、いつか痛い目を見るぞ　それと、俺が別世界の人間にもかかわらず、この世界の杓子定規で計ったのがそもそも間違いだ」

結局、これはクロノが意図的に起こしたことで、全く事件性もないものだと説明された。わたしたちが現地生物だと思っていた獣も、クロノの部下にいる召喚士の召喚獣だった。

アースラに戻ったわたしは、肩を落とさざるを得なかった。だって…執務官を目指してるわたしにはわからなかったのに、メリヒムはあっさり解決しちゃったんだもん。ホントに…ヘコむ…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

メリヒムＶｉｅｗ

「はあぁぁぁ……やっぱり、向いてないのかな…？」

周辺の地盤ごと沈下しそうな、重いオーラを出しているフェイト。
先の茶番劇から帰ってきてからというものの、ずっとあんな調子だ。
椅子の上に三角座りをして、膝の間に頭（こうべ）を垂らしていじいじと。もうかれこれ３０分になる。

フェイトの使い魔であるアルフが、四苦八苦しながらなんとか励まそうとしているが、全くといっていいほど効果はない。仕舞いには、アルフもフェイトのように落ち込むのではないか…？

「フェイト～元気を出しておくれよ～」

小さいアルフの耳と尻尾が、シュン…と垂れ下がる。やはり動物系の種族は、感情が細部に現れるのだろうか？人間よりも自然に近い種族なのだから、可能性がないはずはない。

「メリヒム～お前からもなんとか言ってやっておくれよ～」

ッと、ついつい考察にのめり込むところだった。俺は小さく溜め息を吐くと、フェイトの正面へと腰掛けた。

「…何を落ち込んでいる？」

「……」

「ああいった事件を解決する職を目指しているにも関わらず、素人の俺が解決したのがそんなにショックか？」

「……うん…」

返ってきた返答は酷く弱々しいものだった。周囲が静かだったから聞こえたものの、少しでも雑音が混じれば、この距離でも耳に届かなかっただろう。

そもそも俺は、なのはやフェイト達の間では一体どういうイメージなのだろう？……もう少し情報開示してやった方が良いかな。

「フェイト…お前が俺をどう見ていたかは知らんが、俺は決して素人ではない」

「……え？」

「俺のいた世界———ゼー・メルズでは『ギルド』という俺達のよ

うな人間の為の、一種の情報機関がある　そこで『クエスト』――――要は依頼だな　依頼を受諾し、成功したら報酬を受け取る、というサイクルの機関だ　俺はそこの長に目をつけられ、怪しい目撃情報の真偽や事件の解決などを請け負っていた」

「目をつけられた？　『実力を認められて』とか『才能があるから』じゃなくてかい？」

「実のところ、本当の理由は知らない…俺は『面白い遊び相手を見つけた』だと考えているが…」

これは本当だ。確かに交渉力はここ数年で鍛えられたと感じているが、ノエイラのそれにはまだまだ及ばない。過去数回問うてみたことがあるが、軽くあしらわれてしまった。

登用理由に『錬金術士』があることは伝えない。確証はないが、必ず絡んでいるはず。だが、今のフェイト達には関係ないため、省く。

「まあ、俺の理由はいい　あちら側では俺は、フェイトの目指している執務官のような立ち位置にいた、ということだ」

「…じゃあメリヒムは、わたしから見たら先輩ってこと？」

「おそらく…だからお前の落胆は、俺への侮辱となるわけだ」

『侮辱』と聞いた途端、フェイトの表情が驚愕のものになる。あわわわ…！あうあう…と焦り始めた。

「そ、そういうつもりじゃないよ！！　ただ……わたしっていつも誰かに助けてもらっちゃってるなぁ…って思ったら、なんだか申し訳なくなっちゃって…」

…何故なのはもフェイトも、生き急ぐような考えをしているのだろう？彼女らの年頃なら、もっと自己中心的な考えをしてもいいと思うのだが…

ピンッ

「あたッ！？」

「…子供が年輩者を頼って何が悪い　助けてもらえるなら、助けてもらえばいい」

デコピンで少し赤くなった額をさすりながら、う～と唸っているフェイト。少し強かったか…？

「早く1人前になりたいのはわかるが、背伸びはしない方がいい背伸びはすればするほど、身を滅ぼす可能性が高くなる　この間、なのはが重傷を負ったようにな…」

「う……」

日常生活でさえ、背伸びして料理を作ろうとした子供がケガをするのだから、戦いに近い場所に立つフェイト達が背伸びしたらどうなるか、わからないはずないだろう？

なのはにしてもフェイトにしても、もう少し年相応の振る舞いをすべきだ。欲を言うなら、我が儘を言って年輩者を困らせるくらいがいい。

「だからな」

ポンッポンッ

「今の自分に、多くを望むな　1つ1つ出来ることを増やしていけばいい　大事なのは『昨日の自分より強くなること』だ」

「昨日の自分より……強く…」

「そうだ　今からそれが出来れば、フェイトが俺…いや、クロノくらいの年には、今の俺やクロノなどとっくに抜き去っているだろう」

別にフェイトを気遣っているわけではない。今回の一件で、フェイトの実力及び潜在能力の一端を察した。現在の実力で『俺を上回っている』にもかかわらず、未だ『未完成』。

正直言えば恐ろしい。『天才』ではなく『神童』と言っても過言ではない。桁外れの才覚を持ち合わせ、戦いというものを知ったこの

少女の行く末には、一体何が待ち構えているのだろう？

だからなのか？俺がコイツらに出会ったのは。なのは、フェイト、はやてといった人並み外れた才能の持ち主に出会ったのも、すずかやアルフ、シグナムやヴィータといった、コチラでは特殊な存在である者達と出会ったのも、俗に言う『運命』なのか？……『類は友を呼ぶ』とは、良く言ったものだな。

「……そういえば、メリヒムはいくつなの？」

「俺か？　暦や時間がズレてるかもしれないが…一応１６だ」

ピシッ

ん？何故固まる？

問いかける間もなく、フェイトはどこかへ通信しようとしていた。モニターに映ったのはクロノ。伝え忘れていたことでもあったのだろうか？

《どうした？　フェイト》

「クロノ！！　重要なことがわかったよ！！！」

《じゅ、重要？》

「そう！　メリヒムってクロノと『同い年』なんだって！！」

フェイトの叫ぶような声が、向こう（おそらくアースラ）に響き渡り、音が消えた。だから、何故固まる？

ただ、俺も驚いた。クロノの身長は、俺と１０～１５センチほど違ったので、てっきり2、3下だと思っていたが…

「俺とクロノは同い年だったのか…」

「ウ、ウソだあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5481x/

世界と錬金術士

2011年11月21日12時21分発行